

序

虐げられた女性の悶えが、私をしてペンをとらしめた原因の一つであった。すべて生きることは苦悩である。苦悩の中に生きて、しかも生活そのものを光たらしめるためには、考えねばならぬ問題が二つある。

一つは無智である。われらの生活が不断に真の人生を創造する光は仏教のいわゆる智慧である。無智なるがゆえに、世の中及び自分に対して、正しいものの見方をしない。正しいものの見方を欠いた時、その生活は行きづまる。不断に正しい教養を受けて自分自身をつちかねばならぬ。

今一つは苦悩の中に立つ力の欠乏である。力の根底は慈愛である。人生に対する熱愛、人に対する熱愛、それにおいて無限に苦悩に働きかける力はない。慈愛の眼を不断につちかうものは宗教的・道徳的教養である。意味から言うとな力の源泉は信念である。

女性も男性よりも愚痴であるという。遺憾ながらそれを否定することはできぬかも知れぬ。けれども、それは断じて女性本来の不可抗的な原因ではなくて、教養の不足であり、過去の社会組織の罪である。女子は外、苦難に堪え、内、煩悩を克服する力に乏しい、しかしながらその自覚と信念によつては、男性と色彩を異にした、女性独特の世界が建設されうることを信ずる。もし女性が真に自覚し、本来の美德を輝かすならば、その影響は男性よりもっと根本的であり、重大である。

この一章は、以上の意味において女性の胸に「微かな何ものかを」と思つて書いたもので、地上の寂しさと苦悩とに血みどろになつてゐる凡人におくる手紙である。

私たちはあまりに負けてはならぬ教育を受けてきた。そしてこの負けじ魂のために自他ともに傷ついてきた。私は、一切人とともに、もつとほんとうの姿にまで下りて、合掌の世界に人間生活を建設することを切念する。この一書は平凡人の合掌の書である。

昭和二年八月三十一日